

## 祭りのなごり

作——追田琴梨

八月も中ごろ、もっとも蒸し暑い季節だ。今年も喧噪が背後から聞こえる。

先祖が帰るとき迷わないための飾り物があちらこちらに施され、立ち並ぶ電信柱の間を渡して提灯が吊され始める。提灯には競うように町内の店々の名が書かれている。

子どもたちの間に浮き足だつてそわそわとした空気が流れる。闇雲に秘密が増える。打ち明け話は祭りの当夜、遅くまでとっておかなければならない。ちょうど火花が消えてしまうころだ。

そしていたずらを防ぐため、思い出したかのように港の封鎖がなされる。

そのころ十一歳の私も、当然のように胸に秘め事とよこしまな思いを抱えている。会ったとたんに漏らしてしまわないように警戒しながら、待ち合わせた海辺への道を歩いている。

夏休みと言えど午後の港は静かで、遠くに学ラン姿の中学生二人が自転車を押している以外に人気はない。

あちらこちらに積み上げられた貝殻の山。干潮で水の引いた海では船はどれも地面の上に立っている。満腹顔の野良猫たちが、日陰でだらしなく昼寝をしている。

立ち入り禁止の札を下げ、埠頭への道を阻む潮をこびりついた荒縄を跨ぎ越えようとするも、少しばかり足が届かない。この高さはくぐった方が楽だろうが、五年生の自尊心はそれを許さない。小学校を三つに割れば最高学年に位置するのだ。身長だつて男の子より高い。一歩後退して、勢いをつけ方手つきながら飛び越える。ショートパンツだつたせいで太ももが少し擦れてしまう。

干潟では満潮の流れに逃げ遅れた魚が跳ねていた。一面の泥を臨むよう一段高いコンクリートブロックに、私のお目当て、学生服姿の女の子が座っている。画板を首にかけ、画用紙に目の前の光景を今日もスケッチしている。

瘦せすぎて少し不格好な白いセーラー服に、彼女言うところの「見た目にも暑苦しい」深い紺色の長いスカートがときどき風になびく。口には二つに折つて吸うアイスキャンディーの空ケースがぐわえられていた。

「遅い」と振り向きもせずに言う。

「宿題が」

私は反論しかけ、お母さんから今日の分が終わるまで遊びに出ちゃだめだと怒られた、という言葉は飲み込んだ。

彼女の前では家族の話は禁句なのだ。本人から直接言われたことはないが、いい顔をしないのには気づいていた。五歳年下の私でもすぐに気づけるくらい、機嫌を壊すと分かりやすく嫌な顔をする。

「アイス溶けそうだからきみの分も食べちゃった」

ブロックを昇つて横に座つた私に、そう言つて空のケースを二本とも見せびらかす。

「またおなか壊すぞ」

「食べたかった？」

「でも、溶けてジュースみたいになつてもうたらずかけん……えつと、遅れてごめんね」

「かわいくない。食べられたら泣いたりするかな、つて期待してたのに」

無視して、「なに描いとつたん？」と画板をのぞき込む。お祭りにいっしょに行こう、という言葉はまだ飲み込んだ。今言え、彼女は私にいじわるな気持ちで湧くかもしれない。